

05

## イタリア手話の同時的複合語と逐次的複合語——知覚の実験

ミルコ・サントーロ

(ジャン＝ニコール学院／高等師範学校 [フランス])

### 背景

完全に同時的な複合語は手話にはあまり見られないが[1]、片方の形態素が類別詞の形式であれば、比較的多く見られるようである[3]。これらの形式は音韻的な縮約形を示し、これが手話の複合語を同定するテストとして確立している[2]。分散形態論においては、語根-語根の複合をパラメータ的に支配された文法的なオプションとみなす研究者もいるが[5]、複合は範疇のラベルが付された後でのみ許されるとする立場もある[4]。

### 研究目的

i) イタリア手話における同時的複合語と逐次的複合語の認識を実験により比較する。ii) 音韻的な縮約がイタリア手話の複合語を同定するテストとして適切であるかどうかを明らかにする。iii) 同時的複合語と逐次的複合語を説明するために1つか2つの派生形式が必要であるかどうかを検証する。

### 仮説

もし同時的複合語と逐次的複合語が同じように、単一の語のような単位として、たとえば *swordfish*, メカジキのように、認識されるならば、これらには同じように形態統語的な派生が起きるだろう。もし認識に違いがあるならば、これは形態統語的に異なる派生をすることの潜在的なエビデンスになりうるだろう。

### 方法論

刺激：12の同時的複合語と12の逐次的複合語を用意する。それぞれの複合語について、ターゲット文と2つのベースラインを含むミニマル・トリプレットを作成する。最初のベースラインは複合語を単一の語に置き換える。2つ目は複合語を2つの語に置き換える。文の長さは異なり（それぞれ3+1 - 6+1回の手話）合計で72の刺激になる。(1)トリプレットの例は次の通り：

1. a. PAOLO CL-ZIP^CL-CYLINDER BLACK (ターゲット)
  - b. PAOLO SHIRT BLACK (1語のベースライン)
  - c. PAOLO SOCKS SHOES BLACK (2語のベースライン)
- ‘パオロは黒い筆箱／シャツ／ソックスと靴を持っている’

デザイン：19人のろう者の被験者はそれぞれの文の手話の回数を数えるように言われる。刺激はランダム化されている。15の総合的な質問が注意度チェック

として行われ、調査のあとに人口統計学的なアンケートがある。説明はイタリア手話で行われる。

## 結果

被験者と刺激項目をランダム要因にした混合モデルのロジスティック回帰は刺激タイプ（逐次的、同時的、ベースライン1、ベースライン2）と刺激の長さによって有意差を示した。プロットは図1に示すとおりである。刺激タイプについては、同時的複合語はベースライン1のパターンとなり、逐次的複合語はより高いカウントになった。刺激が長くなると精度は低くなった。

## 議論

刺激の長さの効果はワーキングメモリの処理コストであると説明できる。刺激タイプの効果は、同時的複合語は一語の手話であり（従ってベースライン1と区別できず）、逐次的複合語は形態統語的にカテゴリーラベルがまだ見えていると仮定することによって説明できると考える。分散形態論の立場としては、この対照を以下のように説明することを提案する：同時的複合語はカテゴリーのラベリングに先立つ2つの語根の統語的なかき混ぜにより派生する（よってこれらは形態的に単一の語である。3a 参照）。逐次的複合語はカテゴリーラベルが適用された後に2つの語根が結合することによって派生する（3b 参照）。

3. a. CL-ZIP<sup>^</sup>CL-CYLINDER = [np[<sub>v</sub>CL-ZIP][<sub>v</sub> CL-CYLINDER]]

b. HEART<sup>^</sup>EXPLODE = [np[<sub>v</sub>HEART][<sub>v</sub>[<sub>v</sub>EXPLODE]]][np t[<sub>v</sub>[<sub>v</sub>EXPLODE ]]]

## 結論と展望

同時的および逐次的複合語のいずれにおいても全体的に精度が高いという事実は、音韻的な縮約が複合語を検出するテストとして適切であることを示す。ただし、同時的と逐次的な複合語の間の認識的な差異は存在する。本発表ではこの差異を2種類の複合語が異なる方法で派生されることによると結論付ける。

## 参考文献（一部）

- [1] Brennan M. 1990. Productive morphology in British Sign Language: Focus on the role of metaphors. *Current trends in European sign language research*. Hamburg: *Signum*, pp. 205-228.
- [2] Klima E. and U. Bellugi. 1979. *The sign of language*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- [3] Meir I. et al. 2010. Sign languages and compounding. *Compounding*. John Benjamins, 573-595.
- [5] Harley H. 2009. *Compounding in distributed morphology*.